

「外国人から見た日本の剣道」シリーズ

日本文化に憧れ立命館大学に進学、コロナ終息後に念願の剣道を始めたという中国人留学生 翁 静宜さんに、ご自身の人生に大きな影響を与えた剣道についてご寄稿いただきました。

剣道に出会ったきっかけ

小学生の頃から両親と何度も訪れた日本に魅了され、高校では日本語を専攻し、立命館大学に進学した。高校時代、学業の都合で剣道を始めることができなかったが、剣道に対する興味は衰えず、動画や資料を通じてその奥深さと美しさに触れ、魅力に引き込まれた。大学入学後、コロナが終息し、茨木剣道協会を訪れた。最初は中学校の稽古に参加し、夜にも関わらず力強い中学生たちの稽古に触れ、その真剣さと仲間たちとの結束に感動した。

留学生としての私は、稽古する期間が限られているため、先生が問いかけた「本気でやりたいのか。三年で二段を取れるのか？」に、「はい、本気で頑張りたいと思います。」と答えた。これは自分にとって貴重な機会であり、短い期間ながらも精一杯剣道に打ち込みたいという強い意志を示した瞬間だった。先生の期待に応えるために、全力で取り組む覚悟を胸に刻んだ。

初めての昇段と試合

一年間はあっという間で、初段審査の日が近づく中、「初段は大丈夫！受かる！」との先生の言葉に励まされた。初心者仲間との受験は緊張と興奮に包まれ、試合では未知の緊張感に挑戦した。

先生が教えた技や要領を思い出しながら、自分と向き合い、対話することが剣道の真髄だと感じた。緊張や羨望が交錯する中でも、初段審査を通じて得た経験は、剣道の奥深さと挑戦の魅力を味わう上での重要な一歩だった。初段は人生の転機であり、その瞬間は努力と汗が結実した貴重な瞬間だった。初段を取る過程は私にとっての宝物であり、師範の厳しい指導と仲間たちの支えがあったからこそ、この段階に到達できたことに深く感謝している。

普段の稽古も重要だが、試合に出ることの重要性を改めて感じ、人生初の試合として「大阪府女子剣道優勝大会」に挑んだ。試合当日は緊張の中、動きが乱れたが、一本取ればとの思いで臨んだ。一本も取れなかったが、その瞬間の失望よりも感謝の気持ちが勝っていた。この試合経験は普段の稽古では得られない貴重なものであり、敗北から学ぶ多くの教訓が今後の成長につながると信じている。試合は自分の強みや弱みを浮き彫りにし、向き

合うべき課題を示してくれる実り豊かな機会だと感じた。

外国人としての剣道経験

外国人としての剣道修行は、言葉の壁や文化の違いを超えた非常に貴重な経験だった。日本の武道に触れることで、自己探求や精神の成長を感じることができた。異なる文化の中での剣道の修行は、新しい視点から物事を捉える力を養う機会であり、私の人生において大きな影響を与えた。剣道を通じ、異文化の人々と交流し、互いに学び合うことで、世界が広がった。言葉だけでなく、身体を通じてのコミュニケーションが新たな理解を生み出した。同時に、剣道の精神を共有することで、異なるバックグラウンドを持つ人たちとの結びつきが深まった。

剣道への熱意と感謝

剣道への情熱と努力が私をここまで導いてくれた。厳しい稽古と師範の指導に感謝の気持ちでいっぱいである。これからも、剣道の道を真摯に歩んでいきたいと思う。剣道は単なるスポーツではなく、日本文化や武道の精神を理解する手段としても捉えられている。競技の進化だけでなく、剣道の哲学や文化に深く浸り、心の成長も求められる修行の道である。剣術の精神面での成長も期待され、国際的な交流やイベントを通じ、剣道の素晴らしさを広く発信したいと考えている。これからの剣道生活が、新たな挑戦と充実した成果に満ちたものになることを楽しみにしている。剣道を通じて培った価値観や精神力は、私の人生において永遠に影響を与えるであろう。

翁 静宜 (オウ セイイ)



リバ剣(リバイバル剣道・剣士)のすすめ〜「是非一步踏み出して」

学生時代に剣道の稽古に汗を流していた方々が社会人になり、仕事の忙しさや家庭の事情、周囲の剣道稽古場所の諸事情により、剣道再開の気持ちはあるものの一步踏み出せないという方々は、意外に多くいらっしゃるのではないのでしょうか？

今回は52歳で剣道再開された九大剣道部OB友清正博さんにご寄稿を頂き、現在の心境をうかがいました。

この度、「リバ剣のすすめ」の投稿機会を頂きました友清でございます。

私の剣道経歴は

小学校から大学4年にかけて約13年間、部活動で剣道を続けて参りました(ここまで3段とまり)。就職してからは、九州の宮崎県が勤務地となり約28年間過ごしておりました。赴任当初1~2回ほど会社の道場に行ってみましたが、間もなく会社の道場が取り壊されることになり、近くに道場がなかったこともあって剣道とは疎遠になっていました。周囲に剣道仲間がいなかったことも大きな一因だったと思います。

52歳になる年に再開

宮崎から滋賀県に転勤となり、大学の関西OB会に誘われたのがきっかけで剣道を再開いたしました。最初は防具と道着、竹刀の一式7万円くらいの道具を揃えOB会に参加しました。滋賀でも稽古を再開しましたが、当初学生の感覚で稽古すると、面が届かない、胴が抜けない、おまけに身体のいろんな部位が痛くなったりと、最初は苦戦しましたが、何とか普通に稽古ができるようになりました。今は学生の頃とは違った剣道の醍醐味や難しさを味わいながら稽古を続けています。

各地を転々とすることも直ぐに受け入れてもらい

その後、私は大阪に転勤し、そして再び宮崎県へ、次に東京、再び滋賀県、それから現在はまた大阪と各地を転々としています。各地で剣道を通して多くの方とお知り合いになり、再び戻っても直ぐに受け入れてもらい、時には反省会(飲み会)もしながら稽古させて頂けることを有り難く思っています。特に大学時代のOB会では、今でも定期的に稽古し

て、その後反省会と気を許せるメンバー(学生時代の先輩は怖かったですけど・・・)と気軽に接することができるのも、日頃の仕事を離れストレス解消の良い息抜きとなっています。

剣道を再開して10年、自分のペースでそれなりに

この間4段、5段と昇段し、今年ようやく6段を受審できるようになって、これを目標に剣道を続けております。これからも自分の身体と相談しながら少しでも永く続けていけるよう、そして少しでも上達できるよう地道に取り組んでいきたいと思っています。

学生時代の稽古は、“試合に勝つ”という明確な部活動の目標があったので、それなりに厳しい毎日の稽古のトラウマがあって、なかなか一步を踏み出せない方も居られるかもしれませんが、私に限っては、“なかなか思うように打突できない”悩みに、先生方のご指導で少しでも上達できたことを実感した時に喜びを感じ、昇段審査に合格した時に達成感を感じながら、今では自分のペースでそれなりに楽しんで取り組めるようになっています。

生活の一部として

剣道は年齢の垣根を越えて相対することができる数少ない競技。稽古できる環境も比較的整えやすく、若い頃に剣道を経験された方であれば、すぐに馴染み、生活の一部として付き合っていけるように思います。私の学生時代の同期も、リバ剣組が多くいますが、今では剣道論を熱く語りながらマニアックに取り組んでいる者もいますし様々です。

是非一步踏み出してみられたら

剣道のことを頭の片隅にあり、“剣道を再開しよう”と少しでも考えておられる方がおられましたら、是非一步踏み出してみられたら如何でしょう。

九州大学練心会 友清 正博

海外事情シリーズ ～モントリオールの剣道事情～

学生時代のカナダ遠征をきっかけに、大学卒業後、ワーキングホリデーを経てカナダの永住権を得たという阪大剣道部 OB・長浦龍一さん。

モントリオールでの充実した生活と剣道事情について紹介いただきました。

私は 2013 年に大阪大学大学院を卒業後、3 年半、日本で就職した後、カナダのモントリオールに移住しました。現在は、現地のベンチャー企業で証券アナリストとして働いています。最初にカナダに来たのは、2012 年の濱口先生、坪内先生引率の下、大阪府立大学剣道部のカナダ遠征に参加させていただいたのが初めてになります。バンクーバー、ビクトリア、トロントを訪問し、大変いい経験をさせていただき、その時の経験もありカナダへの移住に興味を持ちました。

モントリオールにはワーキングホリデーを利用して入国し、後に永住権に切り替えをしました。モントリオールは都心部ではほとんど英語のみでも生活には困りませんが、公式的にはフランス語が公用語となりますので、ほとんどの仕事は英語・フランス語のバイリンガルが募集要項の必須項目になっています。私はフランス語が話せませんので、モントリオールに来てしばらくは就職活動もなかなかうまく行きませんが、運よく現在の仕事を見つけることができました。仕事では、英語と日本語のみですので、7 年たった今でも、フランス語は全く話せません。カナダでは 9 時から 17 時の残業の無い生活を夢見ていましたが、実際のところは、1 日 12 時間程度、会議がある場合は日本時間になりますので、夜遅くまで仕事をすることもよくあります。休暇に関しては、上司の理解もあり、ジョージ・マッコール先生（大手前高校教諭）主催のエジンバラ剣道セミナーにも参加させていた

だいています。

剣道に関しましては、昨年に地元のコミュニティセンターで剣道教室を始めました。子供や親子を対象にした初心者の方が 6 名程度の小さな剣道クラブではありますが、交際しているカナダ人の彼女（大阪大学留学）の協力もあり、楽しく剣道をしています。10 月には隣の市（トワリビエ）で行われた初段以下を対象とした練習試合に、1 月に剣道を始めた中学生が参加しました。防具を着けての初めての試合経験であり、あまり上手く立ち回れませんでした。本人は楽しんでいたようです。また、この秋には、7 月にチュニジアから移住してきたばかりの女の子が、鬼滅の刃の大ファンという理由で剣道を始め、防具での稽古や模擬刀を使うことを夢見て稽古に勤しんでおります。現状は、定着率が低く、2 ヶ月くらいすると来なくなることが多いのですが、剣道に興味を持ってくれる子供たちが剣道を続けてくれて、剣道教室が徐々に大きくなっていくのが楽しみです。

モントリオールの夏は日本のように湿度が高く、気温も 35 度くらいまで上がりますが、冬は気温がマイナス 20 度くらいまで下がり、気候も乾燥しており、竹刀が 10g から 15g くらい軽くなるため、試合前の竹刀計量は緊張のひと時です。

以上、モントリオールから近況報告となりました。

大阪大学剣友会 長浦 龍一



「道場自慢」シリーズ：日曜会

道場には、その歴史の中で、その精神や指導理念が先輩から後輩へと脈々と引き継がれることにより、その道場ならではの伝統が培われて行っております。

今回お訪ねしたのは、堺の老舗 日曜会。西 善久会長にお話を伺いました。

日曜会の沿革

昭和 40 年半ばごろ、大阪刑務所済美館道場において、大阪矯正管区剣道師範西善延先生の理念のもと研鑽していた剣道愛好家の稽古会が、年を重ねるにつれて盛況の一途をたどり、昭和 50 年 4 月に当時の大阪刑務所長であられた黒笹庶幾先生のお力添えをいただき、名称を「日曜会」と定め、新たに出発しました。

時あたかも、全日本剣道連盟が「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である。」との剣道理念を発布した年でありました。

昭和 53 年には会員数が 50 人を数え、日曜会初めての事業として、故重岡昇範士とともに西先生の故郷である十津川村を訪れました。

これを契機に、今日に至るまで、日曜会の恒例行事として他府県の剣友と交流を重ねてきております。故西善延先生の理念と故下村清先生の正しい剣道の振興にかける熱意と指導をもとに、現在米村幸生先生のご指導のもと、会員一同、**日曜、祝祭日、年末年始**の稽古に励んでおります。

今日、会員が 100 余名を数え、富山、石川、滋賀、和歌山、三重、奈良、兵庫からも多くの剣友が稽古に來会する全国でも有数の剣道団体として活動しています。

稽古方針



戦後 70 年を経て、科学の発展により生活が豊かになり、生活様式も変わってまいりました。そのなかで思いやりや感謝そして人を敬う心が衰退し、人心の荒廃が進んでおります。誠に日本の行末が憂慮されてな

りません。

今、私たちは何を為すべきかを考える時ではないでしょうか。それは自らを律し、人々が心豊かで幸せに生活する社会の実現に貢献できる人材を育成することに尽きるかと存じます。

こうした意味から、心身を錬磨して旺盛な気力を養い、信義を重んじ、礼節を尊び、誠を尽くして自己の修養に努めることを教える剣道は、今の時代にあって不可欠な精神的支柱であります。今後とも正しい剣道を研鑽し、世代を超えた指導者を目指し稽古に励むことも我々の稽古目標の一つではないかと考えています。



初代師範 二代師範 現師範
故西善延先生 故下村清先生 米村幸生先生

歴代の先生方

故西善延範士九段・故奥園國義範士九段・故秋山英武範士八段・故下村清範士八段・故笹井正彦範士七段

指導者の先生方

(範士八段) 松田勇人 (教士八段) 中寛和・山畑阿威磨・上垣友成・花澤博夫・北村宏二・米村幸生・石田洋二 (教士七段) 下垣幸広

稽古日：日曜・祭日・年末年始 9：00～12：00

稽古場所：大阪刑務所体育館

JR 阪和線「堺市駅」下車 徒歩 5 分

南海高野線「堺東」駅下車 徒歩 10 分

連絡先：八木 和世 Tel 090-8233-9639

『稽古の際に心掛けましょう!』シリーズ 1.「品」/2.「格」/3.「品格」

1.「品」着装を見れば品が分かる

(大剣連副会長 剣道教士八段 瀧口雅行)

「品」とは、単なる外見の美しさではなく、人物の言動や雰囲気、そしてその人が持つ優雅さや洗練された印象を意味します。剣道では、単に技術だけでなく、心の修練も重視されており、身なりを整えることは自己管理や精神の統一、他者への敬意を表す手段なのです。

したがって、「着装を見れば品が分かる」という教えは、正しい着装は、武道家としての姿勢や心構えを表すものであり、その人がどれだけ武道の精神を体現しているかを見極める指標となります。